

卑怯者

有島武郎

青空文庫

青黄ろく澄み渡った夕空の地平近い所に、一つ浮いた旗雲には、入り日の桃色が静かに照り映はえていた。山の手町の秋のはじめ。

ひた急ぎに急ぐ彼には、往來を飛びまわる子供たちの群れが小うるさかった。夕餉ゆうげ前のわずかな時間を惜しんで、釣瓶つるべ落としに暮れてゆく日ざしの下を、彼らはわめきたてる蝙蝠こ

うもり蝠の群れのように、ひらひらと通行人にかけかまひなく飛びちがえていた。まともに突つかかつて来る勢いはずすために、彼は急に歩行をとどめねばならなかった。幾度も思わず上体を前に泳がせた。子供は、よけてもらったのを感じもしない風で、彼の方には見向きもせず、追つて来る子供にばかり気を取られながら、彼の足許から遠ざかつて行った。そのことごとく利己的な、自分よがりなわがままな仕打ちが、その時の彼にはことさら憎々しく思えた。彼はこうしたやんちゃ者の渦うず巻まきの間を、言葉どおりに縫うように歩きながら、しきりに急いだ。

眼ざして来た家から一町ほどの手前まで来た時、彼はふと自分の周囲にもやもやとからみつくような子供たちの群れから、すかんと静かな所に歩み出たように思って、あたりを見廻してみた。そこにも子供たちは男女を合わせて二十人くらいもいるにはいたのだった。

だがその二十人ほどは道側の生垣のほとりに一ひとかたま塊りになって、何かしやべりながらも飛びまわることほしないでいたのだ。興味の深い静かな遊戯にふけているのであろう。彼がそのそばをじろじろ見やりながら通つて行つても、誰一人振り向いて彼に注意するような子供はなかつた。彼はそれで少し救われたような心持ちになって、草履ぞうりの爪つまさきを、上皮まきみずだけ播水まきみずでうんだ堅い道に突っかけ突っかけ先を急いだ。

子供たちの群れからはすかいにあたる向こう側の、格子戸こうしど立ての平家ひらやの軒ひらやさきに、牛乳の配達車が一台置いてあつた。水色のペンキで塗りつぶした箱の横腹に、「精乳社」と毒々しい赤色で書いてあるのが眼を牽ひいたので、彼は急ぎながらも、毒々しい箱の字を少し振り返り気味にまでなつて読むほどの余裕をその車に与えた。その時車の梶かじ棒ぼうの間から後ろ向きに箱に倚よりかかつているらしい子供の脚を見たように思った。

彼がしかしすぐに顔を前に戻して、眼ざしている家の方を見やりながら歩みを早めたのはむろんのことだつた。そしてそこから四、五間も来たかと思うころ、がたんとかけがねのはずれるような音を聞いたので、急ぎながらももう一度後を振り返つて見た。しかしそこに彼は不意な出来事を見いだして思わず足をとめてしまった。

その前後二、三分の間にまくし上がった騒ぎの一いち伍ぶ一いち什じゅうを彼は一つも見落とさずに観

察していたわけではなかったけれども、立ち停どまった瞬間からすぐにすべてが理解できた。配達車のそばを通り過ぎた時、梶棒の間に、前扉に倚よりかかって、彼の眼に脚だけを見せていた子供は、ふだんから悪いたずら戯わらが激しいとか、愛あい嬌きょうがないとか、引ひつ込み思案であるとかで、ほかの子供たちから隔へてをおかれていた子に違ちがいない。その時もその子供だけは遊びの仲間からはずれて、配達車に身をもたせながら、つくねんと皆んなが道の向こう側でおもしろそうに遊あそんでいるのを眺ながめていたのだろう。一人坊ひとりぼちになるとそろそろ腹はらのすいたのを感じだしてもしたか、その子供は何の気なしに車から尻しりを浮かして立ち上あがろうとしたのだ。その拍子に牛乳箱の前扉のかけがねが折り悪わるしくもはずれたので、子供は背中から扉の重みで押さえつけられそうになった。驚おどいて振り返って、開きかけたその扉を押し戻かえそうと、小さな手を突つ張はって力ちからんでみたのだ。彼が足を停とめた時はちやうどその瞬間だった。ようよう六つぐらいの子供で、着物も垢あせじみて折り目のなくなった紺こんの単衣ひしえで、それを薄寒うすせそうに裾短すそに着きていた。薄うすぎたなくよごれた顔かほに充血ちゆうけつさせて、口を食くいしばって、倚よりかかるように前扉に凭もたれている様子が彼には笑止わらどに見えた。彼は始めのうちには軽い好奇心こうしんにそそられてそれを眺ながめていた。

扉しりの後には牛乳の瓶びんがしこたましまつてあつて、抜きさしのできる三段の棚たなの上に乗のせ

られたその瓶が、傾斜になった箱を一気にすべり落ちようとするので、扉はことのほかの重みに押されているらしい。それを押し返そうとする子供は本当に一生懸命だった。人に救いを求めることすらし得ないほど恐ろしいことがまくし上がったのを、誰も見ないうちに気がつかないうちに始末しなければならないと、気も心も顛倒てんとうしているらしかった。泣きだす前のようなその子供の顔、……こうした suspense の状態が物の三十秒も続いたらだろうか。

けれども子供の力はとても扉の重みに打ち勝てるようなものではなかった。ああしているとやがておお事になると彼は思わずにはいられなくなった。単なる好奇心が少しぐらつきだして、後あと戻りしてその子供のために扉をしめる手伝いをしてやろうかとふと思ってみたが、あすこまで行くうちには牛乳瓶がもうごろごろと転げ出しているだろう。その音を聞きつけて、往來の子供たちはもとより、向こう三軒両隣の窓の中から人々が顔を突き出して何事が起こったかところちを見る時、あの子供と二人で皆んなの好奇的な眼でなぶられるのもありがたい役廻りではないと気づかったりして、思ったとおりを実行に移すにはまだ距離のある考えようをしていたが、その時分には扉はもう遠慮会釈もなく三、四寸がた開いてしまっていた。と思う間もなく牛乳のガラス瓶があとからあとから生き物のよ

うに隙を眼がけてころげ出しはじめた。それが地面に響きを立てて落ちると、落ちた上に落ちて来るほかの瓶がまたからんからんと音を立てて、破れたり、はじけたり、転がったりした。子供は……それまでは自分の力にある自信を持って努力していたように見えていたが……こういうはめになるとかつとあわて始めて、突っ張っていた手にひときわ力をこめるために、体を前の方に持つて行こうとした。しかしそれが失敗の因だった。そんなことをやったおかげで子供の姿勢はみじめにも崩れて、扉はたちまち半分がた開いてしまった。牛乳瓶はここを先途とこぼれ出た。そして子供の胸から下をめつた打ちに打つては地面に落ちた。子供の上前にも地面にも白い液体が流れ拡がった。

こうなると彼の心持ちはまた変わっていた。子供の無援な立場を憐んでやる心もいつの間にか消え失せて、牛乳瓶ががらりがらりとめどなく滝のように流れ落ちるのをただおもしろいものに眺めやった。実際そこに惹起された運動といい、音響といい、ある悪魔的な痛快さを持つていた。破壊ということに対して人間の抱いている奇怪な興味。小さいながらその光景は、そうした興味をそそり立てるだけの力を持つていた。もつと激しく、ありつたけの瓶が一度に地面に散らばり出て、ある限りが粉微塵になりでもすれば……はたしてそれが来た。前扉はぱくんと大きく口を開いてしまった。同時に、三段の棚が、

吐き出された舌のように、長々と地面にずり出した。そしてそれらの棚の上うんざりと積んであった牛乳瓶は、思つたよりもけたたましい音を立てて、壊れたり砕けたりしながら山盛りになつて地面に散らばつた。

その物音には彼もさすがにぎよつとしたくらいだった。子供はと見ると、もう車から七、八間のところを無二無三に駈^かけていた。他人の耳にはこの恐ろしい物音が届かないうちに、自分の家に逃げ込んでしまおうと思ひ込んでいるようにその子供は走つていた。しかしそんなことのできるはずがない。彼が、突然地面の上に現われ出た瓶の山と乳の海とに眼を見張つた瞬間に、道の向こう側の人垣を作つてわめき合つていた子供たちの群れは、一人残らず飛び上がらんばかりに驚いて、配達車の方を振り向いていた。逃げかけていた子供は、自分の後に聞こえたけたたましい物音に、すくみ上がったようになって立ち停つた。もう逃げ隠れはできないと観念したのでらう。そしてもう一度なんとかして自分の失敗を彌縫^{びほう}する試みでもしようと思つたのか、小走りに車の手前まで駈けて来て、そこに黙^{だま}つたまま立ち停つた。そしてきよるきよるとほかの子供たちを見やつてから、当惑し切つたように瓶の積み重なりを顧みた。取つて返しはしたものの、どうしていいのかその子供には皆目見当がつかないのだ、と彼は思つた。

群がり集まつて来た子供たちは遠巻きにその一人の子供を取り巻いた。すべての子供の顔には子供に特有な無遠慮な残酷な表情が現われた。そしてややしばらく互いに何か言い交していたが、その中の一人が、

「わーるいな、わるいな」

ときも人の非を鳴らすのだという調子で叫びだした。それに続いて、

「わーるいな、わるいな。誰かさんはわーるいな。おいらのせいじゃなーいよ」

という意地悪げな声がそこにいるすべての子供たちから一度に張り上げられた。しかもその糺きゆうもん問の声は調子づいてだんだん高められて、果ては何処どこからともなくそわそわと物音のする夕暮れの町の空気が、この癩かんだか高な叫び声で埋められてしまうほどになった。

しばらく躊躇ちゆうちよ踏ふしていたその子供は、やがて引きずられるように配達車の所までやって来た。もうどうしても遁のがれる途みちがないと覚悟をきめたものらしい。しよんぼりと泣きも得せずに突つ立ったそのまわりには、あらん限りの子供たちがぞろぞろと跟ついて来て、皮肉な眼つきでその子供を鞭むちうちながら、その挙動の一つ一つを意地悪げに見やっていた。六つの子供にとつて、これだけの過失は想像もできない大きなものであるに違いない。子供は手の甲を知らず知らず眼の所に持つて行つたが、そうしてもあまりの心の顛てんとう倒に矢張

り涙は出て来なかつた。

彼は心まで堅くなつてじつとして立つていた。がもう黙つてはいられないような気分になつてしまつていた。肩から手にかけて知らず知らず力がこもつて、唾つばのみこむとぐつと喉が鳴つた。その時には近所合壁から大人までが飛び出して来て、あきれた顔をして配達車とその憐あわれな子供とを見比べていたけれども、誰一人として事件の善後を考えてやろうとするものはないらしく、かかわり合いになるのをめんどろくさがっているように見えた。そのていたらくを見せつけられると彼はますます焦立いらだつた。いきなり飛びこんで行つて、そこにいる人間どもを手あたりしだいになぐりつけて、あつけにとられている大人子供を尻眼しりまなこにかけながら、

「馬鹿野郎！ 手前たちは木偶でくの棒だ。卑怯者ひきょうものだ。この子供がたとえばふだんいたずらをするからといって、今もいたずらをしたとでも思っているのか。こんないたずらがこの子にできるかできないか、考えてもみる。可哀そうに。はずみから出たあやまちなんだ。俺おれはさつきから一伍一いちぶしじゅう仕をここでちゃんと見ていたんだぞ。べらぼうめ！ 配達屋を呼んで来い」

と存分に痰呵たんかを切つてやりたかつた。彼はいじいじしながら、もう飛び出そうかもう飛

び出そうかと二の腕をふるわせながら青くなつて突つ立っていた。

「えい、退きねえ」

といつて、内職に配達をやっている書生とも思わしくない、純粹の労働者肌の男が……配達夫が、二、三人の子供を突き転ばすようにして人ごみの中に割りこんで来た。

彼はこれから気がつまるようないまましい騒ぎがもちあがるんだと知った。あの男はおそらく本当に怒るだろう。あの泣きもし得ないでおろおろしている子供が、皆んなから手柄顔に名指されるだろう。配達夫は怒りにまかせて、何の抵抗力もないあの子の襟えりがみでも取つてこづきまわすだろう。あの子供は突然死にそうな声を出して泣きだす。まわりの人々はいい気持ちそうにその光景を見やつている。……彼は飛び込まなければならぬ。飛び込んでその子供のためになんとか配達夫を言いなだめなければならぬ。

ところがどうだ。その場の様子がものものしくなるにつれて、もう彼はそれ以上を見ていられなくなつてきた。彼は思わず眼をそむけた。と同時に、自分でもどうすることもできない力に引つ張られて、すたすたと逃げるように行手の道に歩きだした。しかも彼の胸の底で、手を合わすようにして「許してくれ許してくれ」と言い続けていた。自分の行くべき家は通り過ぎてしまつたけれども気もつかなくかつた。ただわけもなくがむしやらに歩

いて行くのが、その子供を救い出すただ一つの手だてであるかのような気持ちが出て、彼は息せき切つて歩きに歩いた。そして無性に癩癩を起こし続けた。

「馬鹿野郎！ 卑怯者！ それは手前のことだ。手前が男なら、今から取つて返すがいい。あの子供の代わりに言い開きができるのは手前一人じゃないか。それに……帰ろうとはしないのか」

そう自分で自分をたしなめていた。それにもかかわらず彼は同じ方向に歩き続けていた。今ごろはあの子供の頭が大きな平手でぴしゃぴしゃはたき飛ばされていようと思うと、彼は知らず識らず眼をつぶつて歯を食いしばつて苦い顔をした。人通りがあるかないかも気にとめなかつた。噛み合うように固く胸高に腕ぐみをして、上体をのめるほど前にかしげながら、泣かんばかりの気分になつて、彼はあのみじめな子供からどんどん行く手も定めず遠ざかつて行つた。

青空文庫情報

底本：「カインの末裔」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年10月30日改版発行

1988（昭和63）年6月10日改版23版発行

初出：「現代小説選集」

1920（大正9）年11月

入力：鈴木厚司

1999年2月13日公開

2005年11月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

卑怯者

有島武郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>